

熊本学園大学産業経営研究第43号抜刷
2024年3月発行

『ドイツ労働者旅行ハイキング案内』（1932年）の意義

幸 田 亮 一

熊 本 学 園 大 学
産 業 経 営 研 究 所

『ドイツ労働者旅行ハイキング案内』(1932年)の意義*

幸 田 亮 一

はじめに

- 1 『労働者旅行ハイキング案内』の構成
- 2 労働者旅行の支援組織
- 3 労働者旅行の助成制度—割引運賃と宿泊施設
- 4 旅行案内—ベルリンを中心に

おわりに

はじめに

鉄道や汽船に代表される交通機関の発達には19世紀半ばより、欧米の富裕層のあいだに旅行や避暑などのツーリズムを生み出した。それはやがて、役所や鉄道会社、大企業で働く高給ホワイトカラー層にも広がっていった。第一次大戦前には、労働時間短縮と賃金上昇により、一部の上層労働者のなかにも旅行に出かけることができる人びとも出てきた。

1920年代になると、労働運動の成果として、ワイマール共和国憲法に有給休暇の権利が制定され、業種ごとの労働協約のなかにも有給休暇も取り入れられていった。このような上からの動きだけでなく、第一次大戦前からの、労働者による下からのツーリズム運動の蓄積もあって、20年代半ばから次第に労働者の間に旅行への関心が高まってきた。さらに、労働運動とは別に、ドイツにおいては19世紀末からの青年運動の高まりのなかで、ワンダーフォーゲル運動やユー-

スホステル運動が展開し、青少年のハイキングや旅行を促進する環境が整備されていった¹。

このような動きを背景に、ドイツの労働組合と労働者政党、とりわけ自由労働組合と社会民主党では、労働者の旅行を支援する動きが活発化した。だが、1929年の世界恐慌は、世界のなかでドイツの労働者に最大の打撃を与え、大量の失業者を生み出し、労働者ツーリズムの動きにも水をかけた。

この間、社会民主党は労働者ツーリズム支援の研究を続け、総括的な会議を1929年12月にライプツィヒで開き、1920年代の労働者の旅行支援が不十分であったとの結論に達した。これを受けて、社会民主党指導部は「統一性をもった大きな労働者旅行組織」の形成に着手することを決定したが、世界恐慌のなかで進まなかった²。そういうなかで、ようやく1932年に出版されたのが『ドイツ労働者旅行ハイキング案内』³である。

本書の出版はドイツのツーリズム史、とりわけ労働者ツーリズム史、そしてマスツーリズム史のなかでどのような意味を持つのだろうか。その内容はどのような特徴をもつのだろうか。そして、本書はナチスの旅行大衆化といかなる関係をもったのだろうか。本稿はこれらの疑問に応える試論である。筆者はすでに、労働者ツーリズムについていくつかの論稿を発表して

* 本稿は、2021～2024年度科学研究費基盤研究C（課題番号21K12499）による研究成果の一部である。

¹ Hachtmann (2007), S.109-114.

² Keitz (1992), S.7-9.

³ Dietz Arbeiter-Reise (1932).

きた⁴。それらの研究の一環として『労働者旅行ハイキング案内』を位置づけてみたい。

1 『ディーツ労働者旅行ハイキング案内』の構成

1932年に刊行された『ディーツ労働者旅行ハイキング案内』は、手に収まる新書版サイズで、448頁の分量にもかかわらず良質な紙を用いているので厚さは15mmに収まっている。出版社は、社会民主党の出版社として知られたベルリンのディーツ出版である。出版の背景は、既述のように、社会民主党内に労働者ツーリズムを支援しようという動きが強くなっていたことだ。

労働者旅行ガイドとしては本書が最初ではない。『シェルム労働者旅行案内』(Scherm's Reise=Handbuch für wandernde Arbeiter)という本が出ている。手元にあるのは1905年に出版された第5版だが、調べた限りもっとも古い版は1894年のようである⁵。そうであれば、ウィーンで労働者ハイキング協会が設立された1895年より前に、この種の労働者旅行用のガイドブックが出ていたことになる。ただし、シェルム案内は、鉄道案内が中心で、ある都市から別の都市までの距離について詳細に述べたあと、最後に、都市や町ごとに主要な産業を紹介しているだけである。たとえば、ケムニッツについては、「ザクセンのもっとも重要な工場都市。人口206,584人。綿紡績および染色、捺染加工の主要産地。鑄造や金属加工を含む各種の機械・工具製造」となっており、付録の地図を含

めて、この案内が、おもに遍歴職人用のガイドであることがわかる。これに比べると、『労働者旅行ハイキング案内』は、体系的・網羅的な旅行ガイドブックとして画期的な意味をもったと言える。

これまで、労働者ツーリズムや大衆ツーリズムの研究史のなかで、本書は基本文献として随所に引用されてきている。しかし、この本を体系的に紹介した研究は存在しない⁶。

本書には章節の区分はないが、内容を見ると明らかに3部に分かれているので、本稿では便宜的に、第I部、第II部、第III部と区分する。目次に従うと以下の構成となっている。

(序)

オスカー・ヴェールレの詩
祝辞 アルトゥール・クリスピエン

〈第I部 労働者のための旅行組織と支援制度〉

労働者と職員のための休暇規則
旅行とハイキングの衛生学
組織された協会による旅行(5組織の紹介)
社会主義青年同盟によるハイキング
労働者サイクリスト・モーターサイクリスト
連盟(団結)
自由ヨット連盟
ライヒスバーンの運賃割引
プロイセンの青年育成のための運賃割引
ドイツ郵便自動車の運賃
ユースホステル

⁴ 幸田(2012)、幸田(2020)、幸田(2021)、幸田(2023)。

⁵ Scherm's (1905)。

⁶ ドイツでのマスツーリズム史研究を切り拓いたカイツは、ベーデーカー旅行案内と比較して、この労働者旅行案内の重要性を指摘し、ブルジョワ文化に対する労働者文化としての旅行ガイドを目指したが、必ずしも成功していないと指摘している。しかし、カイツはこの本を体系的に紹介しているわけではない(Keitz(1989))。さらに、ツーリズム史の研究者シュポードも、ワイマル期の労働者ツーリズムの盛り上がりと言及しているものの、労働者ハイキング協会の活動と低価格の民間旅行代理店の登場に言及するだけで、本書を紹介していない(Spode(1980), S.284-289)。

表1 旅行のための名所案内

旅行先案内	水の旅案内
1 ベルリン	1 ブランデンブルクの湖
2 マルク・ブランデンブルク	2 ヴェラ川
3 ポツダム	3 フルダ川
4 リューゲン島	4 ヴェーザー川
5 東プロイン	5 ネッカー川
6 ザクセン・スイス	6 マイン川
7 ハルツ	7 ラーン川
8 リーゼンゲビルゲ	8 モーゼル川
9 ルール地方	9 モルダウ
10 ヴェストファーレンとヴェーザーラント	10 ドナウ川
11 ネッカー渓谷を含むオーデンの森	11 森の中の水の旅
12 シュベッサート縦横断	
13 タウヌスからラーン谷を経てコブレンツへ	
14 マイン地方	
15 シュヴァルツヴァルト	
16 ハンブルクを経て北海へ	
17 リューネブルクハイデ	
18 ニュルンベルク	
19 トイトブルクの森	
20 ミュンヘンからチロル	
21 シュタイアーマルクとケルンテン	

出典) Diez Arbeiter-Reise (1932), S.61-401.

〈第Ⅱ部 旅の名所案内〉

61から401頁まではベルリンから始まる旅行地紹介が占めている。全448頁の大半がこのために割かれており、前半が個別旅行者ガイドであり、後半が水の旅となっている。それを整理したのが表1である。

これをみると、ベルリンを中心とした北ドイツから始まり、中部ドイツを経て、北海方面や南ドイツまで名所が広がっていることがわかるが、あくまでベルリンを出発点とした編集であることが見て取れる。首都ベルリンへ集権化がすすんだ第2帝政期からワイマール時代のドイツの特徴を反映していると言えよう。水の旅の案内がブランデンブルクの湖から始まっているのも同様である。

〈第Ⅲ部 宿泊施設などの情報〉

気象学

今後の祝日予定 1932~1941年

宿泊費無料（テント持参）

小さな料理ガイド

労働者ハイキングと写真撮影

ユースホステル一覧

労働者ハイキング協会の宿泊施設一覧

労働組合の家と人民の家一覧

労働組合の休暇施設一覧

以上のとおり、本書は、まず、労働者の旅行・ハイキング組織などを紹介し、その後、推奨する旅行・ハイキング先を紹介し、最後に旅行のための各種情報を提供するという3部から構成されている。

巻頭を飾るのが、社会民主党系の詩人・作家として活躍したオスカー・ヴェールレ (Oskar Woehrle) の詩である。それは、「春の最初の鼓動を感じる時、鳥が冬の籠から出てくるように、世界の呼びかけを聞いたとき、私たちも同じように牢獄から逃げ出す」から始まる。そして、「工場の騒音を忘れよう、うなり声を上げて轟音を立てる機械のことは忘れよう。……世界は美しい！世界は美しい！働いている人にとって美しさは倍増する！」と、労働者に旅行に行くように強く呼びかける⁷。

それに続くのが、アルトゥール・クリスピエン (Arthur Crispian 1875-1946) の緒言だ。クリスピエンは、第一次大戦前からヴァイマル共和国時代にかけて、ドイツ社会民主党 (SPD) やドイツ独立社会民主党 (USPD) の指導者を経験した政治家である。クリスピエン緒言を要約すると以下のようなことだ。

労働者によるレクリエーションのための旅行やハイキング、そして知識を豊かにすることは、最近の成果のひとつである。そして、有益なものを得るためには、労働者自身で旅行とハイキングを企画しなければならない。労働者の休暇は短いので、無駄に浪費してはならない。賢い労働者は、この『労働者旅行ハイキング案内』を喜んで活用するだろう。それは彼に多くの良い旅行の情報を提供し、そのなかから適切な旅行先を決定する手助けとなる。豊富な経験に基づく、必要な装備や旅行資金の助言を、労働者はこの本から見いだすだろう。しかし、読者はそれ以上のものを得るに違いない。

労働者は、軽々しく出発したり、通常のブルジョアのパンフレットや本のなかで商業主義的に偏向して叙述されている名所を訪ねたりすることを望んでいない。たしかに至るところに見どころが豊富にあるのは事実であり、労働者もそれらすべてを無視すべきではない。しかし、

労働者はそれらを自分に近づけ、現実に即応した方法で理解できるようにすべきだ。すなわち、それらが当時の社会活動の成果として、歴史的記念物として評価されるということだ。私たちは、国民について、彼らの仕事について、彼らの苦しみと勝利についても語らねばならない。ブルジョワの歴史形成のボールが落ちるとき、過去と現在はどれほど豊かになることだろう。『労働者旅行ハイキング案内』は、今日何が起きているか、労働者階級の意味と正当性、その仕事と希望にも注意を向けている。

労働者は、社会的なものの見方を学んだとき、都市と農村の至るところを自分の家のように感じ、力強く未来に確信を持つことができるだろう。人間と自然、労働と自然の間の親密なつながりが明らかになったとき、労働者の自然愛がどれほど高まることだろう。旅行やハイキングは、言葉の最大限の意味で文化的な問題である。自らの頭で考える労働者が行うすべての活動と同じく、旅行活動も意識的に、責任感をもって取り組むことになるだろう。『労働者旅行ハイキング案内』は、社会生活のあらゆる分野で、労働者が自主的に、明確なたちで断固たる解放闘争を主導しようとする努力の現れである⁸。

このように、クリスピエンは熱烈に労働者旅行を応援し、本書出版の意義を強調している。

この後、第I部に入る。その最初は「労働者・職員の有給休暇規定」だ。そこでは、戦前には例外的な「特典」に過ぎなかったものが「権利」に変わり、企業で働く人びとの有給休暇の権利が制定されたのは第一次大戦後の1918年のことだったと指摘する。

すなわち、1918年11月9日のベルリン革命で皇帝が退位したあと、翌10日に社会民主党と独立社会民主党の各3名からなる人民委員政府 (Rat der Volksbeauftragten) が成立し、同年

⁷ Dietz Arbeiter-Reise (1932), S.8.

⁸ Dietz Arbeiter-Reise (1932), S.9-10.

12月23日に「労働協約令」を布告した⁹。ここに労働者の有給休暇の権利が明記され、この後、労働協約の中に有給休暇が取り入れられることになった。

1929年1月1日時点の8,925の労働協約（従業員数12,276,060人の997,977社）のうち、8,350の労働協約（従業員数1,200,450人の972,183社）に有給休暇関係の規制が含まれていた。休暇期間は労働者と職員で違いがあった。休暇の長さは同一会社での勤続年数によって決まる。ほとんどの場合、休暇を取得するには同一会社で最低6～12カ月の雇用が必要となる。

1928年1月1日の調査結果によると、労働協約における労働者の最低休暇日をみると、66.2パーセントが3日以下で、32.7パーセントで3～6日だった。実際に休暇を取得した従業員のなかで、39.4パーセントが6日間以内で、48.2パーセントが7日から12日で、12.4パーセントが12日以上だった。12日以上取得できたのは主に公企業の従業員であった¹⁰。

以上の叙述から、『労働者旅行ハイキング案内』が出た頃の、労働者の有給休暇はまだ短く、日曜を入れてようやく1週間取れるか取れないかであったことがわかる。職員はすでにそれ以上の休暇を確保できるようになっていた。

この後に来るのが、「旅行ハイキングの衛生学」である。ここでは、まず、歩くことが、下肢の筋肉強化と血流増加による代謝の促進を通じて、汚れた職場での労働に伴う不衛生を取り除き、食欲増加、腸活動活性化、自然な睡眠欲、身体と精神の調和をもたらすと、医学的効用を説明する。

そして、ハイキングの目標は、自己の存在感を高め、内面生活を深め、外の世界を意識的に

自分のなかに取り込むことだと述べる。特に若者にとってのハイキングの重要性が強調されている。成人になったとき感じる連帯や階級意識を身につけるのにハイキングほどよいものはないとし、そこで生まれる困難は仲間の団結をもたらすと指摘する¹¹。

これに対して、成人のハイキングでは、自己の身体や体質、職業などに応じて制約が出てくる。山に向いている人もいれば海に向いている人もいる。もっとも、森や溪谷のハイキングは老若男女を問わず、誰でも楽しむことができるものだと述べる。

衛生に関しては、服装に気をつけ、定期的な洗濯を行うことが大切だと指摘する。その上で、本格的な登山に関しては一定の装備とトレーニングが不可欠であり、不安定な天候に気をつけるべきだとする。

身体運動とハイキングは病床にいるドイツ国民の医者だと言う。その後、旅行用救急セットとして薬や包帯などの準備をするように述べて、衛生の項目が終わる¹²。

2 労働者旅行の支援組織

20頁からは労働者のための身近な5つの旅行組織が説明されているので、それらについて要約的に紹介すると以下のとおりである。

① 社会主義教育全国委員会旅行部門

第一次大戦前に生まれていた社会民主党の中央教育委員会（Zentralbildungskommission der SPD）は、党の下部組織として、それまでの図書館設置や読書会、講演会などを統括する組織であった。同委員会にはやくも1906年に旅行部門を設置していた。これは社会主義教育の一環

⁹ 野村（1980）、258頁を参照。

¹⁰ Dietz Arbeiter-Reise（1932）、S.13.

¹¹ Dietz Arbeiter-Reise（1932）、S.15-16.

¹² Dietz Arbeiter-Reise（1932）、S.19.

表2 ドイツ労働組合の家・人民の家共同連合の宿泊施設

州・市区分	所在地	ベッド数	補足
リュウベック	Lübeck	—	
ハンブルク	Bergedorf Hamburg	— 135室	
ブランデンブルク	Rostock Stettin Butzen Brandenburg/Hav. Cottbus Frankfurt a.d.O. Rathenow Schneidemühl Stralsund	— — — 80ベッド — 10ベッド 9室 13ベッド — —	
ニーダーザクセン	Hannover Hildesheim Lüneburg Peine Ulzen i. Hann.	10室 20ベッド — — 個室 4 ベッド、大部屋16ベッド 30ベッド	
ヴェストファーレン	Bielefeld Bochum Rheine i. Westf. Gevensberg Hamborn	— — — 2室 —	
ラインラント	Köln Velberti. Rhnl.	— —	
オーバーザクセン	Altenburg Bernburg Borna Burgstädt i. Sachs. Coswig i. Anh. Chemnitz Dresden Eisleben Görlitz Halle Leipzig Neukirchen i. Erzg. Plauen i. Vogtl. Quedlinburg a. Harz. Reichenbach i.Vogtl. Weisswasser Wittenberg Wurzen Zerbst Erfurt Jena Kahla i.Thür. Nordhausen Ohrdurf	26室 35ベッド — — — — 個室 9 ベッド、大部屋20ベッド — 10室 15ベッド — 32室 50ベッド、大部屋124ベッド — — — 13室 20ベッド — — — — — — 23室 40ベッド — 9室 13ベッド —	
ヘッセン	Darmstadt Frankfurt a.M. Giessen Kassel	— — 4室 8ベッド —	
ベルリン	Berlin	50室 145ベッド	
ザールラント	Neukirchen i. Saargeb..	—	
ヴェルテンバルク	Heilbronn a. N. Stuttgart	6室 10ベッド —	
バイエルン	München Schweinfurt a. M. Würzburg	— — —	
シュレージェン	Breslau Bunzlau Haynau (Schl.) Liegnitz Neurode i. Schl.	— — — 2室 4ベッド 11室 20ベッド	
東プロイセン	Königsberg i.Pr.	—	カリニングラード

出典) Dietz Arbeiter-Reise (1932), S.436-437.

として旅行を組織することを目的とするものだった。第一次大戦後には、その名前を社会主義教育全国委員会に改め、活動範囲を広げた¹³。そして、機関誌「社会主義教育」(Sozialistische Bildung : Monatsschrift des Reichsausschusses für sozialistische Bildungsarbeit)を発行した。

社会主義者によるこの組織は、休暇に関する各種の質問に助言し、外国の労働者旅行組織との友好的なつながりを築き、低価格の旅行を企画することによって、労働者人民の旅行とハイキングへの要求に応えることを目的としている。そのため、労働組合による休暇施設と宿泊施設の建設を通じ、そして人民の家や労働組合の家の建設および良質で安価な宿泊所の確保を通じて、社会的重要性をもつプログラムを実現するべく尽力していると述べる。

ここで登場した人民の家や労働組合の家は、「ドイツ労働組合の家・人民の家共同連合」を結成し、一緒に活動を行っていた。この連合に属する休暇・宿泊施設を示すのが表2である。

ここから二つのことがわかる。まず、北高南低という傾向である。ザクセンやベルリン・ブランデンブルクを含む北ドイツを中心に運動が広がったことを窺い知ることができる。今日、人気があるバイエルンやヴェルテンベルクでの施設整備は微々たる状況であった。第二に、ホテルのように個室内にベッドがある施設と、大部屋にベッドがたくさん設置されており、ユースホステルのような素泊まりの施設が多かったことも見て取ることができる。だが、労働者旅行支援という観点から、このような施設があるのと無いのでは雲泥の差があると言えよう。

旅行に参加できるのは自由労働組合に組織されている労働者や職員、公務員である。旅行は、個人で旅行を手配するのに比べて割安であり、前払い料金のなかに交通費と宿泊費、食費がすべて含まれていた。旅行費用は、一括払いのほ

かに月々の分割払いができた。1931年にこの組織が主催した旅行が紹介されており、それを見ると、国内だけでなく、オーストリアやスイス、イタリアなどの外国まで広がっていることがわかる。

② 労働者ハイキング協会

まず、1895年に社会民主党に属する労働者によってウィーンで誕生したのが労働者ハイキング協会(TVDN: Touristenverein Die Naturfreunde)¹⁴で、1930年代初頭には、ウィーンを本部に、ドイツやチェコスロバキア、スイスなど世界各地に広がっていたと紹介する。そして、その定款によると、協会の目的は、自然の美しさについての知識を伝え、自然への愛を目覚めさせ、科学的知識と国民生活と習慣に関する知識を広め、祖国の保護と自然保護を維持し、青少年を強化することである。そのために、ハイキングだけでなく、観光旅行や宿泊施設建設、講演会、雑誌発行、登山靴販売など多彩な活動を行っていたと続ける。

労働者ハイキング協会がとくに力を入れたのが宿泊施設の建設と整備であり、中央ヨーロッパ各地に自分たちの家を持ち、会員が宿泊する際には互いに快適に過ごせるように厳しい規則を設けていた。この協会も先の社会主義教育全国委員会とおなじように、特別列車やバスなどを調達し、ドイツ内外の多様な旅行を主催していることを紹介している。

③ 国際日常交流会

あまり知られていないこの組織については、以下のように説明されている。

1925年にベルリンの有志によって結成されたのが国際日常交流会(フレディカ Fredika: Die Freunde der internationalen Kleinarbeit)である。過去の戦争が、お互いに外国人のことを

¹³ Keitz (1997)、幸田 (2023)、61頁を参照。

¹⁴ Keitz (1997)、S.152-161、幸田 (2012)、33頁以下を参照。

知らなかったために起こったという反省から、自分たちの手で国際交流を広げることで戦争を防ぐことを目的とした組織だ。この点についてフロマンは、国際交流によって戦争が回避できるとの考えはあまりにも楽観主義だと批判しているが、両大戦間期の反戦運動や国際友好運動について過小評価してはならないだろう¹⁵。

短期間にネットワークを拡大し、1930年代初頭には、ドイツ、オーストリア、チェコスロバキア、スイス、ポーランド、スペイン、フランス、ベルギー、オランダ、デンマーク、スウェーデン、フィンランド、イングランド、スコットランド、アイルランド、ブルガリア、エストニア、ギリシャ、ラトビア、リトアニア、ノルウェー、ポルトガル、ルーマニア、ハンガリーに広がった。

フレディカはまた、国際社会主義学生連盟と協定を結んでいる。そのため、同連盟が代表を務める国内外のすべての大学都市において、学生連盟のメンバーはフレディカと協力して活動している。フレディカはロンドンの「労働者旅行協会」ともとても親密な関係を持ち、同協会のドイツ旅行団は懇親会でフレディカのグループに歓迎される。例えば夏期にベルリンの労働組合の家では毎週水曜日に、まずドイツの現状について説明をうけ、その後懇親会に参加している。

さらにフレディカは、ニューヨークの旅行市民大学である「ポコノ・スタディ・ツアーズ」と協定を結んだ。ドイツのフレディカの拠点をめぐる、ポコノの3カ月の研修旅行には、フレディカのメンバーが同行する。さらにポコノはチロル州のエッツタール・アルプスに自分のサマースクールを運営しており、アメリカからの旅行者に旧大陸の状況を知ってもらうためにドイツ人講師も招いている。

フレディカの雑誌はドイツ語、英語、フランス語で毎月発行されており、会員の自宅に無料で配達される。そして、フレディカの優れた語学コースは非常に人気がある。授業はドイツ語を極力使わない「直接法」で行われる。週2時間の授業で学び続けると25週後くらいには、参加者はクラスの前に立って、自分が経験したことについて自由に話せるようになる。英語、フランス語、スペイン語の授業が提供されている¹⁶。

以上のように、草の根レベルでの労働者の国際交流活動を担ったのがフレディカであったことがわかる。

④ ADGBライプツィヒ支部旅行部門

この組織についての紹介を要約すると以下のとおりである。

ドイツ労働組合総連合（ADGB: Allgemeiner Deutsche Gewerkschaftsbund）のライプツィヒ地方委員会文化部門の旅行事業もよく知られている。同部門は、1925年末に初めて特別列車を仕立てて北ドイツのリューベック、ハンブルク、ヘルゴラントなどに滞在する休暇旅行を企画した。参加資格は自由労働組合の組合員とその家族が中心だったが、それ以外も受け付けた。代金の100RMを一度に支払うことは難しいため、頭金5RMを支払った後毎月12RMを積み立てるという分割払い制度を利用した。翌26年の募集では、予想を25パーセントも上回る740人の参加者があった。その後も順調に発展したが、世界恐慌で大きく落ち込んだものの、32年には予定していた旅行の大部分を遂行している。

これらの旅行でも、参加費には、旅程内のすべての電車や船、車の移動、宿泊費、食事（朝食、昼食、夕食の3食付き）、予定されているすべての訪問およびガイド付きツアーの入場料、バッジ、旅行費が含まれている¹⁷。

¹⁵ Fromman (1993), S.42.

¹⁶ Dietz Arbeiter-Reise (1932), S.31-32.

¹⁷ Dietz Arbeiter-Reise (1932), S.32-33.

⑤ 大ハンブルク交通旅行協会

この組織については、以下のように紹介されている。

大ハンブルク交通旅行協会 GVRH (Der Gemeinnützige Verkehrs- und Reiseverein Gross-Hamburg) の目的は、特にハンブルク都市経済圏における観光と旅行を刺激し、増加させることである。ハンブルク都市圏での会議や大会の開催の誘致、外部の人びとへの助言や情報の提供などを言葉や写真を使って行っている。さらに、同協会が主催する旅行は高い評価を得ており、誰でも参加できる。

その際、旅行代金を期限までに確保するために、ハンブルクの労働者や職員、公務員を対象に月々の分割払いで貯蓄できる貯蓄組織が設立されている¹⁸。

さらに以上の5つの組織とは別に、3つの組織も旅行を取り扱う組織としてとりあげられる。社会主義青年同盟、労働者サイクリスト連盟、自由ヨット連盟だ。これらは、もともと旅行を目的としたものではないが、旅行活動も取り入れた組織として、上述の5組織と別に紹介されている。

⑥ 社会主義労働者青年団のハイキング

これについての説明は、以下のとおりである。社会主義労働者青年団 (Die Sozialistische Arbeiterjugend) の少年少女たちが自由時間を充実させる多様な行事の中でも、ハイキング活動がとくに重要だ。その活動報告書によると、ハイキングを中心とする屋外イベントが全イベントの4分の1以上を占め、1931年には35,738件も開催され、参加者数は合計750,466人だった。若者がハイキングと呼ぶ「旅行」は、今日の若者のライフスタイルの一部となっている。天気と予算が許す限り、彼らはバックパックに荷物を詰めて、森、湖、山へ出かける。彼らは、

自宅での快適さ、快適なベッドでの休息、そして日曜のロースト肉を食べることを喜んで断念し、代わりに彼らは大きな喜びや健康、仲間を獲得する。母なる緑、田舎道、農家には、世界を知りたい若者にとって見るべきもの、聞きたいものが豊富に存在する。そして、自然や文化における驚くべき現象は、世界と人間社会の発展と発展の法則についての生き生きとした情報を提供する。

生き生きとした共同生活、一緒に行進し、一緒に遊んだり歌ったり、食事を作ったり、ユースホステルやテントで一夜を過ごしたりすることは、誰もが喜びと誇りで満たされる。このようなハイキング旅行は、表面的な「お互いを知る」ことを可能にするだけでなく、誰もがお互いの良き同志となり、規律と個人の責任を学び、実践し、グループは全員を結び付け、強力な個人的および目的を与えるコミュニティになる。

だからこそ、労働者階級の若者は時間と金が許す限りハイキングを行うのである。ほとんどの日曜日はそのためにとってであるが、土曜日から始まることも多く、ときには数日間旅を続けることもある。もちろん、旅行は通常、地元周辺に限られている。しかし、社会主義労働者青年は、そのような旅行を非常に波乱に富んだものにする方法を知っている。「大きな旅」は広い地域へ向かう。すでにドイツ内外の美しい地域の多くを知っている労働者階級の少年や労働者階級の少女たちがいる。彼らが、個人として長期休暇のハイキングに出かけることはおそらく稀であり、グループ旅行だけがそのような機会を与えてくれる。

社会主義労働者青年団の会員になるとさまざまな特典が得られる。州公認の青少年支援団体として、すべての社会主義労働者青年団は、ライヒスバーンおよび船会社、路面電車などの他のほとんどの交通会社の運賃を50パーセント割引される。また、海外の多くの交通機関でも大

¹⁸ Dietz Arbeiter-Reise (1932), S.35-36.

幅な運賃割引が認められている。さらに、社会主義労働者青年団は、「ドイツ帝国ユースホテル協会」と提携しており、多くのユースホテルが利用可能で、ユースホテルの安くて清潔な宿泊施設は、若者の宿泊施設の充実に大きく貢献している。今日のユースホテルには、整った滞在空間や安価な食事のオプションが備わっていることが多く、悪天候時に訪れても安心だ。さらに社会主義労働者青年団はたくさんの自前のハイキング施設や休暇施設も所有している。これらはしばしば単なる小屋や小さな農家の建物であることが多いが、多くの場合、数百のベッドがあり、日常的によく整備されている¹⁹。

特に注目に値するのは、多くの社会主義労働者青年団に特有のものと呼ぶことができる各種のテントだ。これらは通常、直径4メートルの大きな円形のテントで、約15人の若者を収容できる。テントハイキングは多くの労力と多くの困難を伴うが、若者たちは活動と冒険的な経験への欲求のため、それを煩わしいとは思っていない。さらに、テントで一晩過ごすことはとても安価であり、どこでもお互いが決して密接とはいえない固定的な宿泊施設からグループを自由にするのだ。

このように、青年のための安価な旅行の魅力が生き生きと描かれている。

⑦ 労働者サイクリスト連盟

この組織については歴史が紹介されていないので、補足しておくとおりのとおりである。

労働者サイクリスト連盟「連帯」は、1896年にオッフェンバッハで誕生した。最初は社会民主党の理解も得られず、組織拡大に苦労したが、自転車によるビラ配布などの活動を通じて存在感を高めた。また、労働者の自転車購入を

支援する自助組織をつくとともに、立派な本部建物ももち、労働者のツーリングを普及させ、室内のサイクルサッカーやアクロバット乗りなどにも力をいれた²⁰。

これを踏まえて『案内』でのサイクリスト連盟の紹介を要約すると以下のようになっている。

定款によると連盟の目的は、労働者階級のサークルで自転車と自動車の利用を奨励し促進することだ。この目的は、あらゆる種類のサイクリングおよびモーターサイクリススポーツの実践、団結の育成、会員、特に若者の指導と教育、自転車および自動車の事故、自転車の盗難、賠償責任訴訟および死亡事故の場合のサポートの提供、および法的支援の提供によって達成される、と定められている。

1932年現在、約330,000人の会員がおり、うち、女性会員が51,000人、モーターサイクリストが29,000人となっている²¹。

おそらく、サイクリスト連盟は独自に多様な広報を行っているので、ここでは簡単な紹介にとどめているのだろう。

⑧ 自由ヨット連盟

あまり知られていないこの連盟についての紹介は以下のとおりである。

労働者階級の愛好家たちで結成している自由ヨット連盟の行うセーリングスポーツは、休日の楽しみとなっている。さらにそれだけでなく、数日や数週間、旅行やハイキングを楽しむことも可能である。

31年前から存在する自由ヨット連盟は、その旗の下に2,683人の会員と1,465隻のボート（モーターボートを含む）を持つ42クラブを統合している。ヨットはもはや一部の特権層のスポーツではない。今日では、実用的なヨットを購入する資金は、市民農園に四阿を建てるのと

¹⁹ Dietz Arbeiter-Reise (1932), S.38.

²⁰ 幸田 (2021) を参照。

²¹ Dietz Arbeiter-Reise (1932), S.42, Beduhn/Klocksinn (1995), S.27.

同じくらいの費用である。宿泊施設の心配がなく、遠くの海岸まで出かけることのできるヨットに多くの労働者が熱中しているとのことである。

このように、参加者は少ないが着実なセーリング活動を行っていることがわかる。

3 労働者旅行の助成制度—割引運賃と宿泊施設

これらの、労働者旅行支援組織の紹介のあとでライヒスバーンおよびバス会社の旅行割引が紹介される。それらを要約すると以下のとおりである。

① 鉄道と郵便自動車の割引運賃

ライヒスバーンでは、相乗り旅行の場合、一定の運賃割引を提供している。定款によると次のとおりだ。大人15名以上の場合、割引運賃の対象となる。旅客列車の1等、2等、3等の片道運賃は、参加人数が大人50名までの場合は25パーセント割引となる。51名を超える場合は3分の1の割引となる。急行列車の利用の場合、割増料金は同割合で減額される。4歳から10歳までの子どもが2人の場合は大人1人とみなされ、子ども1名の場合は通常の半額となる。

とりわけ、青少年への運賃割引に重点が置かれている。大人の指導者が青少年を率いて行う小旅行では、指導者と20歳未満の青少年の運賃が半額に割引される。ただし、これらは、若者の身体的、道徳的、または知的な教育を促進することを目的とした旅行、特にハイキング旅行、スポーツ、およびクラブが主催するその他の青少年育成イベントでなければならないとの制限がある²²。

さらに、郵便自動車も青少年の旅行支援を行っていた。遠足や交流旅行の運賃は特別に設

定されており、郵便局の案内所で請求できる。協会や学校は、貸し切り自動車を申請すると特別な運賃割引を受けられる。

② ユースホステル

前半の最後に、ユースホステルが取り上げられている。

労働者の旅行やハイキングの際に安価なユースホステルは、労働組合の宿泊施設や労働者ハイキング協会の宿と並んで頼りになる宿泊施設だった。もともとは、ドイツの市民層の運動として始まったユースホステル運動であるが、ワイマール期には社会民主党の影響力が及ぶようになった²³。

1932年現在、2,300のユースホステルがあり、年間50ペニヒの会費を払い会員になることで各地のユースホステルを利用できる。ユースホステルは原則として20歳までの青少年が利用できる。成人の団体ハイカーも個人ハイカーも受け入れるが、リーダーもユースホステルに泊まらねばならない。もちろん、ユースホステル内での喫煙と飲酒は固く禁止されている。そして、到着や就寝時間など厳しい規則を守らねばならない。

1932年の時点で、『労働者旅行ハイキング案内』で紹介された、ユースホステルが立地する自治体は合計311であった²⁴。全部で2,300のユースホステルがあり、一つの自治体に平均すると7つあることになる。もちろん、ベルリンやミュンヘンなどの大都市にはそれ以上のユースホステルがあった²⁵。

本書の最後を構成する第三部は、気象学から始まり、テント旅行、旅の食事、写真、宿泊施設紹介である。

気象学については、旅の安全のために最低限の知識は必要だとして、大気圏の構造から始ま

²² Dietz Arbeiter-Reise (1932), S.55.

²³ Krauss (2011), S.108.

²⁴ Dietz Arbeiter-Reise (1932), S.431-433のリストから集計した数字。

²⁵ ユースホステル運動の始まりについては佐藤 (2006) を参照。

表3 労働者ハイキング協会の宿泊施設一覧

地域区分	施設数
北ドイツとハイデ地方	20
トイトブルクの森、ウェストファーレン、ヴェーザー山地、ハルツ山	29
チューリンゲン	15
ザクセン山地、エルツゲビルゲ、エルベ砂岩山地、ラウジッツ	20
ラインと支流の谷	16
タウヌス、フォーゲルスベルク、シュベッサート、ハッセン山地	13
オーデンの森	10
ブライスガウ、シュヴァルトツヴァルト、ボーデン湖	24
シュヴァーベンアルプ、ヘガウ、ヴェルテンベルクのフランケン地域など	22
フランケンユラ、マインフランケンなど	15
バイエルン山地など	45
ファルツの森、フンスリュック山地	9

出典) Dietz Arbeiter-Reise (1932), S.434-444.

り、新聞などに掲載される天気図について習熟するように呼びかけている。

その後、1932年から1941年にかけての復活祭など毎年変わる祝日の一覧を挟んで、宿泊費無料の旅行としてテント持参旅行がテントの種類や張り方、そこでの過ごし方に至るまで、図を交えて詳細に解説されている。さらに、自炊旅行のための料理ガイドと労働者旅行のための写真撮影についての紹介が続く²⁶。

最後の宿泊施設の一覧も労働者旅行には不可欠の情報で、ユースホステルから労働者ハイキング協会の宿泊施設、労働組合の家と人民の家、労働組合の休暇施設がすべて紹介されている。これらの中でもっとも詳しく紹介されているのが労働者ハイキング協会の宿泊施設である。それを整理した表3から、ほぼ平地である北ドイツが少ないのに対し、森や山岳が広がる中部南部ドイツに宿泊施設が多いことがわかる。

4 旅行案内—ベルリンを中心に

頁数でいちばん多い第Ⅱ部の名所案内についても紹介しておこう。

最初に登場するベルリンは、他の地域に比べて別格の扱いになっており、頁数も多いし、歴史も詳細に説明されている。その理由はいくつか考えられる。まず、これが書かれた1931年という年は、ワイマール共和国の最後の頃であったということだ。1871年に誕生したドイツ帝国の首都になって以来、政治や経済、文化面でのベルリンへの集中化が進んだ。第二の理由として、帝政ドイツが倒れ共和国が誕生する主要な舞台になったのもベルリンで、ワイマール共和国を支えた労働組合や政党の拠点もベルリンに集中していたということだ。そこで、本稿でも名所案内に関してベルリンを中心にその叙述の特徴を整理しておきたい。

まず、観光地としてのベルリンについて、1930年にはドイツ内外から150万人の観光客がやってくる、ドイツを代表する観光地であることが紹介される。そして、現在のベルリンの姿

²⁶ Dietz Arbeiter-Reise (1932), S.401-431.

は、社会民主党の指導のもと、1920年に旧来のベルリンにその周辺の自治体を取り込んで大ベルリンが誕生したことによると指摘する。1932年のベルリンの人口は420万人で、710万人のニューヨークと440万人のロンドンに次ぐ大都市だと誇る。1929年に選出された235人からなる市議会の主政党は、最大の社会民主党が64議席で、次に共産党が40議席、国民党が16議席、民主党が14議席、ナチス党が13議席であったと紹介している。ナチス政権誕生の前年のベルリン議会ではナチスは弱小政党だったことがよくわかる。

その後、就業構造や代表的企業が紹介されているのは、労働者旅行ガイドならではの特徴だが、それらについては省略する。この後、興味深いのがベルリンの近代史の紹介である。

まず、1848年の3月革命の際に、宮殿前で多くの市民や職人、労働者がプロイセン軍によって殺されたことを紹介し、ホーエンツォレルン家の500年間におよぶ強圧的政治を批判する。そして、ベルリンでは貴族に比べて市民の力が弱かったことを、王室による建造物に比べて、市庁舎が貧弱だという事例をあげて指摘する。とりわけ、ウンターデンリンデンから、オペラ広場、武器庫広場、ルストガルテンに至る空間と建造物については「まちがいなく素晴らしい傑作」²⁷であると案内書も認めている。

1914年8月1日にヴィルヘルム2世は軍の動員命令に署名しドイツの第一次大戦参戦が決定したが、その前日の7月31日の夜、王宮のバルコニーから国民に挨拶している。王宮北側のルストガルテンは1918年になって、政党や労働組合、帝国旗をかかげた大集団のデモンストレーションの場所となった。

帝政時代に王立広場と呼ばれた広場はいまは共和国広場に名前が変わっている。ここは、1918年11月のドイツ革命で帝政が倒され、社会

民主党のフィリップ・シャイデマンが共和国宣言を行い、これをきっかけにヴィルヘルム2世がオランダに亡命することになった主要舞台となった²⁸。さらに、ヴィルヘルム通り74番地は、王室庁だったところが1919年以降、大統領官邸となり、初代のフリードリッヒ・エーベルトが着任し、現在はその後継者のヒンデンプルクが執務している。その界限には官庁が集中している。さらに近くのライプツヒ通りにはヴェルトハイム百貨店がある。

このように、ドイツ革命の舞台について詳しく紹介しているところが、この案内書の大きな特徴である。さらに、社会民主党や労働組合関係の建物についても詳しく紹介している。たとえば、社会民主党系の出版社として知られるディーツ出版が入っている建物があるのはリンデン通り2番地で、リンデン通り3番地は社会民主党の本部があると紹介している。この建物には中庭をはさんで4つの建物に、党の中核の業務を扱うオフィスが集中しており、図書と資料を収蔵する党図書館も入っている。さらに、1884年以來の党機関誌「前衛」(Vorwärts)を発行するための大きな回転印刷機を備えた部署もある。その裏に、近代建築家ハインリヒ・メンデルスゾーンの手がけたドイツ金属労働者協会の記念碑的な建物も立っており、その1階には労働組合による自転車・オートバイ販売所も入っている、と続ける。

さらに旧市街の交通の要所であるシュピッテルマルクトには、ドイツ労働組合総連合の壮麗な建物がそびえている。その建物は、「労働者銀行」として知られる労働者・従業員・公務員銀行AGの本部を含む側廊を、1924年に拡張したばかりで、1930年にはすでに1億6,800万ライヒスマルクの預金を持ち、約40億ライヒスマルクの貸出を行っていた、と述べる²⁹。

²⁷ Dietz Arbeiter-Reise (1932), S.75.

²⁸ 成瀬・山田・木村編 (1997)、117頁を参照。

²⁹ Dietz Arbeiter-Reise (1932), S.83.

この案内書は墓地も紹介している。しかも、労働運動や社会主義の貢献者だけでなく、ラーテナウ (Walther Rahenau) やハルスケ (Johan G. Halske) などの墓も紹介している。生産力を重視する社会主義者の案内書らしい観点だといえる。このことに関連して注目すべきは、ベルリンの大工業企業の紹介があることだ。たとえば、ボルジッヒ (Borsig) の工場を取り上げ、同社がつい最近1931年のクリスマス前に経営破綻し、ラインメタル社と合併したことが紹介されている。さらにジーメンス社や AEG 社も紹介している。

さらに面白いのはペーター・ベーレンス (Peter Behrens) のタービン工場 (Turbinehalle) も取り上げられていることだ³⁰。ベーレンスは、ドイツ工作連盟の代表的人物としても知られるモダニズム建築や工業建築の分野で新しい時代を切り拓いた人物だ。また、「一見の価値があるのは、ブリッツにあるいわゆる蹄鉄集落だ」と紹介するベルリンの公営住宅についての説明も面白い。これは、建築家マックス・タウトによって、最もシンプルな正面デザインとラインを備えた現代的な立方体スタイルで設計されたものだと書いてある。しかし、これは間違いで、建築家はマックスの兄で著名な建築家ブルノー・タウトの設計によるものだ。これに関連して「ベルリン北部のフォルクスパーク レーベルゲにあるアフリカニシェ通りのルートヴィヒ・ミース・ファン・デル・ローエの住宅建築も、同様に一見の価値がある」と述べているのも、同時代の社会主義的文化運動へのいち早い着目と言えよう。

以上、ベルリンに関するところを詳しく紹介したが、それ以外の地域について簡単に補足すると、ルール地方ではクルップ工場を、ハンブルクでは海運会社を、イエーナではカール・ツァイス工場を紹介している。さらに、ミュンヘンではドイツ博物館を紹介しているのも労働

者旅行ガイドらしい視点だと言えよう。

おわりに

最後に『労働者旅行ハイキング案内』の意義について整理しておきたい。

第1に、本書は、それまでの労働者ツーリズムの活動の集大成であるということができる。すでに述べたように、本書は労働者ツーリズムの最初の案内書というわけではなく、19世紀末より『シェルム案内』があった。だがそれは遍歴職人を念頭に編集されたガイドであったのに対し、本書は、労働者全体を対象とした、旅行組織から支援制度、宿泊施設、名所案内まで含めた網羅的なガイドブックである。

本書は、労働組合などに組織されている労働者だけでなく、若者も含めた民衆のための案内書といえる。そのために、ユースホステルや鉄道運賃割引など詳細な説明があり、名所案内にも力が入っている。本書が詳しく紹介しているテント旅行やユースホステル利用の短期旅行は、組織に属さない青少年にも影響を及ぼしたと考えられる。学校の生徒にとっても、職業教育を受けていた青少年にとっても頼りがいのある1冊になったことだろう。旅行やハイキングに必要な実用的な情報を満載した本書は、多くの労働者が待ち望んだ案内書だった。だが、まことに残念ながら、世界恐慌の打撃をうけ、膨大な失業者が存在した1932年に出版されたため、これを携えて旅行した労働者は限られていた。経済が回復したら旅行に出かけようと考えていた労働者も多かったことだろう。

第2に、本書は、ブルジョワ・市民層向けに存在した『ペーデーカー旅行案内』に対し、労働者向けの「もうひとつの旅行案内」を目指したということである。宿泊施設としてユースホステルや労働組合、労働者ハイキング協会の宿を利用したり、テント泊を推奨したりしている

³⁰ Dietz Arbeiter-Reise (1932), S.96.

ということだけではない。交通手段も徒歩や自転車、割引運賃による鉄道利用を推奨していることも、旅行支出が限られる労働者向けの旅行ガイドらしいところである。さらに、旅行で訪れるところも、一般の名所だけでなく、ベルリンの事例で明確なように労働運動にゆかりのある場所や建物を推奨している。

ツーリズム研究者のシュポデーは、1920年代に登場したフォードシステムと「メトロポール」などの映画が大量生産・大量消費の文化を広げ、それがツーリズムにも影響し、ドイツ人のなかに「マストーリズム」への意識を生み出したと指摘している³¹。労働者ツーリズムの普及を目指した本書は、出版社の意図とは別に、ドイツにおけるマストーリズムの誕生を促した1冊だったといえることができる。

第3に、本書は、20年代までの労働者ツーリズム運動の集大成であるだけでなく、その後のナチスのKdF（歓喜力行団）運動にも取り込まれただけでなく、第二次大戦後の大衆ツーリズムに影響を及ぼした古典であるということだ。ナチス政権の余暇活動支援の土台になったのが本書だった。だが、本書出版の翌年1933年1月にナチスが政権をとり、すぐに労働組合と社会民主党を解体した。ナチスは本書にかかれた労働者旅行の理念や実践方法をしっかりと取り入れる形で、歓喜力行団（KdF: Kraft durch Freude）を組織していく。本稿の最初に紹介した社会民主党による「統一性をもった大きな労働者旅行組織」の努力と成果はナチスによって横取りされたといえることができる。

ナチスは、大量宣伝と大量動員により目に見えるかたちでツーリズムを取り込んだことにより、ナチスこそ大衆ツーリズムを発展させたという誤解されている。しかし、実際は19世紀末からの労働者の粘り強いツーリズム運動が根底にあったことを確認させてくれるのが、『ドイツ労働者旅行ハイキング案内』なのである。

³¹ Spode (2004), S.127-130.

〈参考文献〉

- 幸田亮一 (2012)、「第一次大戦前のドイツにおける『労働者ツーリズム』の誕生」『熊本学園商学論集』17(1).
- 幸田亮一 (2020)、「第一次大戦前ドイツにおける青年労働者と余暇」『熊本学園商学論集』24(1).
- 幸田亮一 (2021)、「第一次大戦前ドイツにおける自転車工業の発展と労働者サイクリスト連盟の誕生」『熊本学園大学経済論集』27(4).
- 幸田亮一 (2023)、「ワイマール期ドイツにおける労働者ツーリズム」『熊本学園大学産業経営研究』第42号.
- 佐藤智 (2006)、『リヒャルト・シルマン伝』バレード.
- 成瀬治・山田欣吾・木村靖二編 (1997)、『世界歴史大系 ドイツ史3—1890年～現在』山川出版.
- 野村正實 (1980)、『ドイツ労使関係論』御茶の水書房.
- Dietz Arbeiter-Reise- und Wander-Führer : Ein Führer für billige Reise und Wanderg* (1932), Berlin : J. H. W. Dietz.
- Beduhn, Ralf / Klocksinn (Hg.) (1995), *Rad- Kultur-Bewegung 100 Jahre rund ums Rad: RKB Solidarität*, Essen: Klartext.
- Buchsteiner, Thomas (1984), *Arbeiter und Tourismus*, Diss. Eberhard-Karls-Universität Tübingen.
- Fromman, Bruno (1992), *Reisen im Dienste politischer Zielsetzungen Arbeiter-Reisen und "Kraft durch Freunde"-Fahrten*, Diss. Stuttgart.
- Hachtmann, Rüdiger (2007), *Tourismus-Geschichte*, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.
- Keitz, Christine (1989), *Zwischen Kultur und Gegenkultur - Baedeker und die ersten Arbeitertouristen in der Weimarer Republik*, in: *Reisen und Leben*, Heft 19.
- Keitz, Christine (1997), *Reisen als Leitbild : die Entstehung des modernen Massentourismus in Deutschland*, München: Deutscher Taschenbuch Verlag.
- Krauss, Eva (2011), *Das Deutsche Jugendherbergswerk und seine Gleichschaltung durch die Hitlerjugend (1909-1933)*, Diss. Paderborn.
- Spode, Hasso (2004), *Fordism, Mass Tourism and the Third Reich: The "Strength through Joy" seaside resort as an Index Fossil*, in: *Journal of Social History*, Vol.38, No.1.
- Scherms (1905), *Scherms Reise=Handbuch für wandernde Arbeiter mit einer Eisenbahnkarte und zwei Orientierungskarten*, 5 Auflage, Stuttgart: Verlag von J. Scherm.